Ⅰ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「駕籠(かご)に乗る人、かつぐ人、そのまた草鞋(わらじ)を作る人」。この昔ながらの言い方は、一見すると、「乗客 - 運搬客 - 草鞋の製作者」というつながりが、あたかもそれぞれの家計の豊かさの序列であることを告げているかのようにも響く。実際、この言い方は、「下には、まだ下があるものだ」という意味で、職業の貴賤(せん)の序列を示すかのように口にされることもある。

しかし仮に、草鞋とりわけ駕籠かき用の草鞋の製作が、高度な熟練を必要とし、引く手あまたであった、としてみよう。そのときには、まさに「そのまた草鞋を作る人」が、「駕籠に乗る」上客になる。その場合には、「駕籠に乗る人、かつぐ人、そのまた草鞋を作る人」という言い方は、もはや「下には下がある」という意味はもたず、それとは別の意味をもつ。それは他でもない、この言い方が、それぞれの活動の相互依存の関係を物語っているからである。

A

たしかに、さまざまな仕事のあいだには、そのきつさの違いもあれば、見返り（報酬）の違いも存在する。そして、そうした違いは、それぞれの文化において、仕事の重要度の違いという意識とも連動している。しかしながら、そうしたさまざまな仕事は、それぞれに相互に依存しあい、全体として複雑な協業を構成している。

仕事について働くということは、そうした相互依存のネットワークに自ら能動的に参与する、ということに他ならない。自分の活動は、他のもろもろの活動がつつがなく遂行されているおかげで可能となり、また他のもろもろの活動が可能となるための条件となる。自分の活動が、こうした相互依存のネットワークの網目の一つを織り成すようになる、ということが、すなわち仕事をもって働くということなのである。

こうした事情は、経済学の分野では、「社会的に有用な労働」が仕事である、という言い方で表現されたりもする。しかし「社会的に有用」ということの眼目[B]は、「誰もが必要とするもの、必要とするようになりうるものを作り、届ける」というところにあるのであって、全社会的に注目されるような顕著な有用性ということではない。

したがって、さまざまな社会的な役割の中でも、経済活動において自分のいる位置を示す役割は、格段の意義を有している。この役割を負うことによって、どんなに見知らぬ他人を前にしても、その人に対して‐その人が必要とするもの・必要とすることがありうるものを提供する者として‐ある、ということを相互に確認できるようになる。すなわち、こうした役割は、人間としての社会的な存在を相互に承認しあうときの、もっとも普遍的な足場を与えてくれる。

しかし、社会的に有用な仕事は、承認の足場ではあっても、社会的な承認のすべてなのではない。このことを二種類の役割の関係に即してもう少し考えてみよう。

そもそも、そのつど他者に対して‐何ものかとして‐ある、という各自の存在が社会的に承認され、〝ここで、このようにしていてよい〟と肯定されるということは、あくまで具体的な生身の個人との間柄における事態であって、各自の内面で生じる秘私的な出来事ではないし、国や会社といった抽象的・超個人的な何かとの関係で起こることでもない。

C、自分の存在が承認され、肯定されるためには、特定の個人との間柄での個人的役割の遂行が不可欠である。こうした特定の人との間柄における相互承認こそが、互いに相手の代替不能性の承認をともない、翻って各自の存在の取り替えのきかなさを認めあうことにつながる。

しかしながら、もし、特定の個人に対する、個人的な役割の遂行がすべてであった、としよう。そのときには、人は個人的な信頼が成り立っている親密圏に引きこもることになる。こうした引きこもりが徹底的になればなるほど、直接に眼差し・眼差される、という対面の関わりしかなくなってくる。こうなると、それぞれにとって、〝相手に映っているであろう自分〟の姿を確かめようとすることが、もっぱらの関心となる。ところが、その場合、各自は「私は相手にとって〇〇である」という以外の仕方では存在しえない。のみならず、相手のほうもまた、「私にとって××である」という以外の仕方では存在しえない。そうなると、各自の存在のありようは、「××にとっての〇〇にとっての××にとっての……」という形で、いわば合わせ鏡のように、どこまでいっても完結しない（これは、「二重の条件依存性」と呼ばれる事態に特有の問題であり、『自分であるとはどんなことか』〔勁草書房〕の中でやや詳しく述べてあるので、興味のある方は、そちらをご覧いただきたい）。

こうなると、それぞれが、合わせ鏡もさながらの、確たる像の見えない不安と苛立ちをぶつけあうことになる。こうした人間のあり方の不毛さと空疎さは、さまざまな文学作品において、如実に描かれたとおりである。

「あなた」・「私」という対面の間柄における対他存在の承認は、自分と相手とを共に包んでいる、より大きなつながりのなかに係留されて、はじめて限定され安定したものとなる。それぞれが異なる社会的な役割を負っていることを理解し、対面で向かい合っているだけでは見えない相手の姿が理解できるようになってこそ、対面の間柄も、合わせ鏡のように向かい合うだけではない、安定したものとなる。したがって、自分の存在が承認され肯定されるためには、他方では不特定の任意の個人とのあいだでの社会的役割を遂行することによって、そうした人々とのあいだでも相互承認が成立しなければならない。

そして仕事という社会的な役割は、万人が相互に依存しあっている協業のネットワークにおいて、しかるべき一つの網目となるということであり、相互性の射程がもっとも広い役割であった。したがって、仕事をもつという役割を引き受け、遂行していくことは、馴染(なじ)みの空間・親密圏をもこえた全体の中での互いの存在を相互に承認するためには欠かしえない意義を有している。

F、仕事さえこなしていれば、自分の存在が承認され、肯定されるということにはならない。いま、ある人が、仕事に打ち込んで、誰もが必要とするもの・必要としうるものを提供する役割をこなしている、とする。しかし、もしそれだけであるなら、特定の個人としての持続的な存在承認には十分ではない。

G、仕事に代表されるような社会的な役割は、あくまで不特定の他者に対する役割であり、その役割を負うのが誰であるかということは、対人的な間柄のように本質的な問題にならないからである。依存しあっている他人が不特定のままであるかぎり、あなた自身もまた、不特定の一人にとどまる。もし、あなたが見知らぬ相手に向かって、「他の人々同様に、あなたも……のときには〇〇が必要でしょ？　私は、その〇〇を提供しているのです」という以外には何ひとつ語れない、としよう。その場合には、あなたは、相手にとっても「〇〇を提供する人の一人」でしかない。

その場合には、相手にとっては目の前にいるのが、あなたでなくとも一向に構わない。そこで成り立つのは、たかだか「〇〇の提供者」――「〇〇の（潜在的）使用者」という、役割同士の関係でしかない。しかるに、そうした役割同士の相互依存的な関係だ

けでは、人間としての対他存在の相互承認には十分ではない。

たしかに、私たちは、みな生きているかぎり、そのつど・そのつど何らかの役割を遂行している。しかし、私もあなたも、そうした役割の束に尽きるのではない。あなたも、時間の推移・場所の変化とともに多種多様な役割をこなしている。そのとき、あなたが「役割を遂行している」のであって、あなたが「役割である」のではない。

もし、仕事だけでもって自分の存在が承認され肯定されていると思い込んでいるとしたら、その人は、気づかぬうちに自分の存在を、役割の遂行者であることへと切り詰めてしまっており、不特定の人々を宛先とした肩書[H]きに頼っているにすぎない。これのみを頼んで自負していた人が、そうした役割・肩書きを失ったときには、底なしの空疎感を味わうことになる。

「〇〇を提供する、あるいは使用する」という役割だけに注目すれば、その役割を遂行するのは、あなたでなくても構わない。あなたの他にも、その役割をこなせる人はたくさんいる。しかし、役割を遂行するのは、他の誰でもないあなたであり、あなたという人は一人しかいない。このことが認められ肯定されないのなら、自分の存在が認められたことにはならない。

しかし、繰り返しになるが、そうした唯一性の承認も、自分ひとりで紡ぎ出すことはできない。そうした唯一の存在であることの承認もまた、Aさんに対して夫であり、Bさんに対して旧友であるといった、特定の個人とのあいだでの個人的な役割を離れては生じえない。「他の誰でもない、他ならぬあなた」という呼びかけは、過去から現在にいたるまで、そうした個人的な役割を引き受けあい・認め合った中から生じる呼びかけであり、そうした呼びかけに応えて、未来に続いていく関わり合い（コミットメント）を引き受けていくことなしには、唯一性の承認が生じることもない。

このように、①過去・現在そして未来に連なる、対面での相互承認と、②互いに匿名の、膨大な相互依存ネットワークへの参与と、この二つは両々相俟(あいま)って、私たち人間の存在、そのつど他者に対して‐何ものかとして‐ある、という存在を可能にしている。くどいかもしれないが、この二つについておさらいをする。

①自分と相手が二人だけで対面し合っているだけで、自分も相手も、それ以外に何の間柄もとりむすんでいないとしたら、それぞれの対他存在のありようは、合わせ鏡もさながらに、どこまで行っても確定しない。そのように互いに向かい合っている同士が、

それぞれ、膨大な相互依存のネットワークの中では不特定の他人に対して‐何ものかとして‐ある、という事実が、目の前の相手にとって‐何ものかとして‐ある、ということを下支えしてくれる。

②他方、もし、膨大な相互依存のネットワークの中で、不特定の他人に対して何ものかである、という以外には何の間柄もないとしたら、その人は、人間としては、つまり相互に対他的な存在としては、空虚である。それは、不特定の人に渡す名刺の肩書きだけを頼りに生きている人の、その空虚さが如実に物語っているように、である。膨大な相互依存のネットワークの中で、いかに日の当たる位置を占めていようとも、対面での相互承認が生じないのなら、その生は、動物の生に近い。

このように、①特定の個人とのあいだで対人的な役割を引き受け遂行することと、②不特定の人々とのあいだでの社会的役割を遂行することは、その人の存在の承認を可能にする、いわば車の両輪であって、そのどちらが欠けても、対他存在の承認は不安定になり、〝ここで・こうしていてよい〟と安堵(あんど)しうる居場所は危うくなる。

（中略）

改めて言うまでもなく、生存を確保するという観点から見れば、仕事について働くということは、生活を維持し再生産するための糧を得るための活動である。しかし、そのつど他者に対して何ものかとしてある、という人間としての存在という観点から見るならば、何らかの仕事について働くということは、ごくかぎられた人々との個人的な間柄を離れても、すなわち見知らぬ不特定の人々に対しても、そのつど他者に対して‐何ものかとして‐ある、という自分の存在が確証される、ということに他ならない。このように仕事について働くということは、生き延びるための手段には尽きない意味をもっている。

のみならず現代では、多くの人は何らかの集団に属して働いており、職場の人間関係のある部分は、家族やサークルにも似た親密圏を構成している。たしかに、いまの実際の仕事の現場では、先にふれたような労働環境の劣悪化にともなって、ノルマにつぐノルマに追われて息つく暇もない。そこでは、親密な間柄も期待しがたく、いわんや面識のない無数の人々に対しても‐何ものかとして‐ある、という社会的な存在が確証されて安堵する、などという台詞(せりふ)は、絵空事にしか響かないかもしれない。

もし働く環境がそこまで破壊されているとしたら、それは深刻な問題である。しかし、たとえば、あまりにも多忙で家庭を顧み

るゆとりがなくなったとしても、それとともに顧みられるべき家庭がなくなるわけではない。それと同様に、あまりにもノルマがきつくて息つく暇もないとしても、だからといって不特定の見知らぬ人々とのあいだでの社会的な存在の承認、という意味がなくなってしまうわけではない。

かくして私たちは、〝人は、生きるために働かざるをえない〟という、あの圧倒的なまでに正しく響く答[I]についても、今や次のように言うことができる。生きることは、働くことと別のことではない。働くこととは別個に、生きるということがあって、働くことは、それとは別個に生きるための手段だ、というのではない。

「生きるためには働かざるをえない」という必然性は、一方では、「働かないと食べていけない」という事実に由来する必要性でもある。しかし、この必要性は、人間として、互いに存在を肯定しあって生きていくための規範的な要件でもある。仕事を得て・働くということは、たんに個体を保存するための手段なのではない。

周りからの刺激に反応して生存していく動物とは違って、私たちが生きるということは、人間として、つまり対他存在として相互に承認しあって、生きるということである。そのように相互に承認しあう間柄において、〝こうしていてよい〟と存在が肯定されることは、〝いい人生〟を送るために、つまり他人からも肯定され自分でも納得のいく人生を送るために必要なのである。

（大庭健『いま、働くということ』筑摩書房　二〇〇八年より引用　問題作成の都合上一部変更）

問一　空欄部 A には、次の枠内のイ～ヘで構成された文章が入る。論旨が通る順に並べ替えたものとして最も適切なものを、①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 1 。

イ　草鞋を作る活動は、駕籠をかつぐ活動を支えており、したがってまた駕籠に乗る人をも支えている。

ロ　しかし、駕籠かきの足を保護する草鞋が作られないなら、どんなに金をはずんでも駕籠で運んでもらうことはできない。このことを、草鞋を作る人も、駕籠かきも、そして駕籠に乗る人も、よく知っている。

ハ　お互いに何の面識もないけれども、ここには、各自の活動がお互い他人のおかげであるような、相互依存の関係が成り立っている。

ニ　と同時に、草鞋を作る活動は、駕籠に乗る人が払う報酬によって可能となっている。

ホ　草鞋を作っている人は、駕籠かきの顔を知らないし、いわんや駕籠に乗る人となんの面識もない。

ヘ　そのかぎりでは、草鞋を作る活動は、なんの面識もない不特定の他人と関係しているにすぎない。

①　ホ→ハ→イ→ロ→ニ→ヘ
②　ホ→ヘ→ロ→イ→ニ→ハ
③　ホ→ハ→ロ→イ→ヘ→ニ
④　ロ→ヘ→イ→ホ→ニ→ハ
⑤　ロ→ヘ→ハ→ホ→イ→ニ

問二　傍線部B「眼目」の類義語として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 2 。

① 起点
② 視点
③ 欠点
④ 要点
⑤ 採点

問三　空欄部 C 、 F 、 G に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 3 。

① C：だから　F：したがって　G：しかし、だからと言って
② C：したがって　F：しかし、だからと言って　G：ただし
③ C：したがって　F：しかし、だからと言って　G：というのも
④ C：しかし、だからと言って　F：だから　G：ただし
⑤ C：しかし、だからと言って　F：だから　G：というのも

問四　傍線部D「確たる像の見えない不安と苛立ち」が生じる原因として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 4 。

① 特定の個人との間柄での個人的役割が遂行されていないから。

② 相手に映っていると考えられる自分の姿が、自分にとってあまり好ましいものではないから。

③ 人間のあり方の不毛さと空疎さが、さまざまな文学作品で書かれているから。

④ 「あなた」・「私」という対面の関係において、存在のあり方が互いにいつまでも完結できないから。

⑤ 社会的役割を遂行することで、不特定の人々とのあいだで相互承認が成立しているから。

問五　傍線部E「より大きなつながりのなかに係留されて」とは、具体的に何を意味しているか。空欄部を次の形式に従って四十字以内で記しなさい。ただし、「社会的役割」「相互承認」という二語を必ず用いること。解答は 国語解答用紙 。

四十字以内 ということ。

問六　傍線部H「肩書きに頼っている」人として不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 5 。

① 仕事に打ち込み、誰もが必要とするもの・必要としうるものを提供する役割だけをこなしている人。
② 誰に対しても不特定の他者にとどまっている人。
③ 社会的な役割同士の相互依存的な関係しか持っていない人。
④ 仕事で与えられた役割の遂行者であると自分の存在を切り詰めてしまっている人。
⑤ 特定の個人とのあいだで個人的な役割から離れられない人。

問七　傍線部I「〝人は、生きるために働かざるをえない〟という、あの圧倒的なまでに正しく響く答」とあるが、「圧倒的なまでに正しく響く」理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 6 。

① 仕事について働かなければ、生活を維持し再生産するための糧を得ることができないから。
② 仕事の現場では、ノルマにつぐノルマに追われて息つく暇もないという現実があるから。
③ 家庭を顧みるゆとりがありすぎると刺激がなく、退屈で生きる気力を失ってしまうから。
④ 働くことは、人間として、互いに存在を肯定しあって生きていくために必要であるから。
⑤ 人間は、肩書きや社会的地位に執着するような特性を持っているから。

問八　本文の内容に合致するものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は $\boxed{7}$ 。

① 人間は、時間の推移・場所の変化に関係なく単一の役割しか持たないため、「役割を遂行している」のではなく、自分自身が「役割である」と考えられる。

② 「他の誰でもない、他ならぬあなた」という呼びかけは、現在の個人的な役割を引き受けあい・認め合った中から生じる呼びかけであり、唯一性の承認において過去や未来の関わり合いは必要ない。

③ 過去・現在・未来に連なる対面での相互承認と匿名の膨大な相互依存ネットワークへの参与の両方によって、人の存在の承認が可能となる。

④ 働けない辛さとは、協業のネットワークをつうじて、万人の生命・生活を維持し再生産するのに必要なものを作り出し、必要とする人の手に届ける活動に参与できないという事実から生じる。

⑤ 多忙で家庭を顧みるゆとりがなくなってしまうと、それとともに顧みられるべき家庭がなくなってしまい、いい人生を送ることはできなくなってしまう。

問九　次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 8 ～ 12 。

1　生きた言葉は歴史の中でヘンヨウしていく。 8

①用　②様　③容　④要　⑤洋

2　今回の期末試験の結果は日頃からの努力のタマモノである。 9

①球　②弾　③珠　④玉　⑤賜

3　上司からチセツな文章だと注意を受ける。 10

①拙　②切　③折　④窃　⑤摂

4　コンイにしている先生に就職の相談をした。 11

①懇　②婚　③魂　④墾　⑤痕

5　経営学の講義で組織文化のジョウセイについて学ぶ。 12

①剰　②畳　③錠　④醸　⑤浄

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

コミュニケーションというものは、共通の歴史的背景の中で言葉を使っているから互いに理解が生まれる。今の若者の言葉だって、今の若者の文化を理解していなければ理解できるわけがない。共通の音楽を聞いて共通の映画を観て共通の本を読んで共通のタレントを知っていて、初めて言葉として成立している。言語はその背景をすっ飛ばして独立して理解できるものではないのだ。

それはアメリカでもヨーロッパでも同じだ。

たとえ同じ英語をしゃべっていたとしても、そこにはプエルトリカンもいればメキシカンもいれば日系もいればチャイニーズもいる。ポーランド系もいればアイリッシュもいる。それらの言語の意味合いは同じではない。だからこそ、欧米諸国は文化統合を促し、共通の文化を何とか持たせようとする。家庭や国家の捉え方も統合しようとする。

A ハリウッド映画の最大の効用がそれだろう。

なぜ、向こうの刑事モノのドラマの主人公は、ほとんどが別居中なのか？

そこから始めないと感情移入ができないからだ。向こうのオヤジが持つ共通の危機感として、家庭を追われるというものが最大公約数的にある。

金をとられて子供もとられ、週に一回会えるか会えないかもわからない。何のために生きているのかわからない。そこから、親父は親父たるために頑張る。父性を強調する。

これがドラマの根幹にある。

アメリカでは家の中で犬を飼っていて、言うことを聞かせられない奴は最低だという文化がある。だから歴代の大統領も犬と一緒に写真を撮る。クリントンだけはソックスという猫が有名だったが、歴代の大統領はみんな犬を飼っている。そして、家庭はうまくいっているということをたえずアピールする。奥さんを連れ回し、子供と一緒に積極的にメディアに出る。これもまた B のひとつだ。

つまり、コミュニケーションとは異なる文化を交換する行為でもあるわけだ。
異なる文化を交換する行為には、必ず摩擦と抵抗が生まれる。摩擦や抵抗を持つからこそコミュニケーションの動機が生まれる。
なぜこの人はこんなことを言っているのか？
それを知りたいから、コミュニケーションをとろうとする。
その根本にあるものが、個人的な好奇心であってもビジネス的な利害であってもいい。この人の言っていることが理解できないと仕事にならないという理由からでもいいし、女の子を口説き落とすためでもいい。この金持ちをたらしこみたいという邪（よこしま）な動機でもいいし、単純に面白そうだなという興味本位でもいい。
ともかく、本来コミュニケーションとは、そういう異なる者同士の摩擦や抵抗なしにはありえない。ところが今の日本ではありえている。
むしろ、いかに自分が無抵抗であるかが価値として通用しているのだ。
たとえば、オヤジギャグというものがある。
これは若い世代にすこぶる評判が悪い。とくに若い女性には最悪だ。
それなのに、なぜオヤジはウケないギャグを言うのか？
ひとことで言えば緩衝材である。我々オヤジはオヤジギャグというベースがあって初めて安心して人とつきあえる。僕もそうだが、オヤジ同士の会話というのは半分以上が馬鹿話しかしていない。あとは人の悪口だ。
人の悪口もオヤジギャグもどんな意味があるのかといえば、ようは「私はあなたに敵意を持ってはいませんよ」と言っているわけだ。
動物が自分の匂いを嗅がせて相手の警戒を解くのと同じように、我々オヤジはオヤジギャグを飛ばしている。だから、若い女の子にウケようなんて気持ちはこれっぽっちもないわけだ。
オヤジギャグはもちろんオヤジ特有のものだが、本質は若者も同じだ。

たとえば自分から行動方針を出さない。できるだけ気を遣って、みんなの意見に従うようにする。だから、いつまでも一箇所でたむろしている。そして、仲間と一緒にいるために携帯であっちこっちにメールを出しまくる。これもまた、自分が無害であることを周囲に知らせるための根回しだ。(C)

同様のことが、アニメーションの世界でも起きている。

アニメで原作モノ――つまり、人気のある漫画をアニメ化するとき、一昔前なら、アニメとしてどのように作るかということをまず考えた。

D

でも、そんなことはどうでもよかった。自分がこうしたいという動機なしに映画は作れない。そしてそれは、それなりの評価も受けた。僕はその評価のおかげで、その後も映画を作り続けることができたし、今の僕があるのもそのおかげだ。

ところが今は漫画をアニメ化するとき、いかに原作どおりに作るかが問われる。

原作どおりにやれば評価される。極論すれば、セリフは一字一句たりとも変えないのが望ましいし、レイアウトすら変えてはいけない。ちょっとでも解釈が違うとたちまち非難される。しかし、原作と寸分違(たが)わず演出すると評価され、ヒットするという構図がある。

実際には、アニメと漫画は別物だ。音声も入っているし色もついている。何よりアニメは静止画ではなく動画だ。それでいて、ニュアンスとして原作に忠実であるということをいかに実現するか？

実はこれはかなり高度な技術だ。ある意味で好き勝手にやるよりも難しい。

それでも、漫画とアニメという異質な表現が出会うことで本来生まれるはずの摩擦や抵抗を、日本のアニメ業界は求めていない。だから、「原作に忠実にやっています」という言葉が喜ばれ、「原作に忠実だ」ということが褒め言葉にもなる。(E)

僕はそんなつもりは毛頭なかったから、主人公の「ラムちゃん」を神棚にあげてしまった。(F)

「ラム」という主人公によって成立していた女性原理の世界を、男性原理の世界に作り替えてしまったのだ。

もともと高橋留美子という作家は女性原理の権化みたいな漫画家で、すべてを女性の願望で描いている。特定の誰かの配偶者になってしまったら選択肢はなくなる。どんなに才能があろうが、どんなに素晴らしい女性だろうが、誰かの従属物になってしまう。だから絶えず判断を保留する。

『めぞん一刻』なんて、その最たるものだ。宮さんの言葉を借りるなら「あの五代ってお兄ちゃんが響子さんを押し倒せばそれで終わる」ということになる。乱暴な言い方だが、ようするに「結婚してくれ」と言えば物語は終わってしまうということだ。

言わないから、あの物語は何年も続いた。逆に言えば、何年も続けるためにあの男を優柔不断にしたわけだ。いつも言うのだけれど、主人公が優柔不断であるとか、根拠を持たないがゆえに起こるドラマはドラマではない。そして、日本のアニメや漫画や小説の多くはこれに当てはまる。すべての主人公が碇（いかり）シンジくんであり、アムロ・レイくんであり、彼らには一様に根拠がなく動機もない。

ようするに未熟なのだ。

未熟であるがゆえに生起するドラマはドラマとは呼ばない。ドラマとは「価値観の相克」のことだ。俺はあんたが好きだ。あんたも俺が好きだ。でも、なぜか二人は一緒になれない。これならドラマたりえる。だから、好きだということを言わないで永遠に続くドラマはドラマとはいえないのだ。

これもまた、根源的にはコミュニケーションの問題である。

好きだと告白してしまったら終わるかもしれない。告白しなければつきあっていられる。問題は、そこから先の結論を日本人が必要としているのかということだ。

少なくともアニメや漫画の世界では、その先にある結論は求められていない。

では、政治の世界はどうだろうか？

日本人の政治的動機とは一体何だろう？　外国とそこそこうまくやって外貨を稼ぎたいということ以外に、何か国として発したいメッセージはあるのか？

覇権国家になりたいのかといえばそんな気はさらさらないし、アジアの盟主になりたいなんて願望も、もはやこの国にはない。それは一部の政治家と小説の中だけの話だ。

結局のところ、この国では異なる文化の摩擦も求められてはいないし、価値観の相克も求められてはいない。だから、本当のドラマも求められていない。震災の被害にあった人たちの願いの大半も昔に戻りたいということだ。安寧な日常以外に求めているものがないなら、コミュニケーションをとる必要もないのである。

しかし、もしあなたが、何かをなしとげたいと思うのなら、自らが率先してコミュニケーションをとる必要がある。

そのとき大切なことは、他人のコミュニケーションの方法論に惑わされるのではなく、自分なりのコミュニケーションのマニュアルを持つということだ。

（中略）

何が言いたいのかといえば、べつに世の中でいわれるようなコミュニケーションの方法論に相乗りするのがコミュニケーションをとるということではないということだ。

スマートフォンがなくてもインターネットがなくても、そんなことは気にする必要はない。同様に、自分にとって有効なら僕のようなオヤジが何を言おうとスマートフォンでもインターネットでもバンバン使い倒せばいい。

自分が何かを成したいのなら、自分なりのコミュニケーションのシステムを作ればいい。人と会うのがどうしても嫌ならば、そんな自分でも可能なコミュニケーションの方法論を生み出せばいい。

だが、何よりまず大切なのは、何かを成したいという意志だ。

それを実現するために誰かの協力が必要ならば、その誰かを説得する必要がある。

説得というのは論理的でなければできないことだ。だから、人を説得しようと思ったら自分のロジックを鍛えるしかない。

喩(たと)えを出し、事例をあげ、結論を先に言うようにしたり、あるいは最後までひっぱったりする。相手が中学生なのか、オヤジなのか、奥さんなのか、一対一で話す場合と壇上から話す場合でももちろん違う。それはその場で合わせていくしかない。

ただ、共通して言えるのは、「相手は自分を信用していない」という前提から始めるということだ。
信用していない相手を説得する。だから、様々なテクニックを駆使して言葉を尽くし、ロジックを強固にする。
議論とはそういうことだ。その過程を経ているのであれば、結果としてどういう結論に達するのかということは、本当はどうでもいい。
大切なのは、そこでもれなく語れたのかということだ。語らうことの総量が問題なのであり、その語らいの中でより深く思考していく。
だから、僕は、考えるために話している。話し始めないと見えてこないテーマもある。
話すこと、それ自体にも意味はあるのだ。
僕の監督作「うる星やつら2　ビューティフル・ドリーマー」には「終わらない日常」を相対化するというテーマがあった。だから、学校の鐘が鳴るところで終わりにし、「これだって日常なのかどうか怪しいぜ」という謎かけも残した。
けれど、多くの者は、そこで描かれた永遠に続く文化祭前日というもの自体に憧れ、喜んだ。その快感に浸った。〝コンビニのあるサバイバル〟を相対化しようとした結果、別の願望を満たしてしまった。観客たちが、終わらない日常を選択したのだ。
震災を契機に、この「終わらない日常」なるものが根底から崩れたという言説がある。
それが本当なら、僕が「ビューティフル・ドリーマー」を作ったときに込めた目的は震災によってついに叶えられたことになる。
しかし、残念ながら、この指摘は誤りだ。
震災から1年以上が経過した今、日本は何か変わっただろうか？
ものを作っている現場がどうこうという以前に、日本という国が震災前と後でどう変わったか？　変わる兆しがあるか？
少なくとも僕には何も変わっていないように見える。

（押井守『コミュニケーションは、要らない』幻冬舎　二〇一二年より引用　問題作成の都合上一部変更）

問一　傍線部Ａ「ハリウッド映画の最大の効用」とあるが、その内容として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 13 。

① 全世界で人種を問わず誰が見ても面白いと感じるエンターテインメントを作ることで文化統合を果たすこと。
② さまざまな国の人にとっての共通言語である英語を使用して映画を作ることで英語の支配力を強めること。
③ 多くの人が共感できる設定をドラマの軸にすることで、価値観を共通認識させていること。
④ アメリカの音楽や映画をあらゆる人種に浸透させることによってハリウッドの文化産業を成長させたこと。
⑤ ハリウッド映画の定番の設定を全世界の刑事ドラマに浸透させることで文化統合を成功させたこと。

問二　空欄部 B に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 14 。

① 欧米文化
② 父性
③ 選挙活動
④ 文化統合
⑤ 最低だという文化

問三　傍線部Ｃ「自分が無害であることを周囲に知らせるための根回し」とあるが、その内容として不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 15 。

① 若者ができるだけ気を遣ってみんなの意見に従い、いつまでも一箇所でたむろする行為。

② 若い女の子にウケようとしてオヤジがオヤジギャグを飛ばす行為。

③ 動物が自分の匂いを嗅がせて相手の警戒を解く行為。

④ オヤジ同士で人の悪口を言う行為。

⑤ 仲間と一緒にいるために携帯であっちこっちにメールを出しまくる行為。

問四　空欄部 D には、次の枠内のイ～ホで構成された文章が入る。論旨が通る順に並べ替えたものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 16 。

イ　キャラクターの解釈が違う。世界観が違う。こいつはこんなことやらない。
ロ　僕が初めて手がけた原作モノである「うる星やつら」でも原作とは異なる僕なりの解釈を提示した。
ハ　監督は原作を自分なりに消化し、自分のテーマをもとうとした。
ニ　ちなみに、30年前の当時でも、僕の解釈は原作ファンから叩(たた)かれた。
ホ　そういうお決まりの原作ファンからの批判だ。

① ハ → ロ → ニ → ホ → イ
② ハ → ロ → イ → ニ → ホ
③ ハ → ロ → ニ → イ → ホ
④ ロ → ハ → イ → ニ → ホ
⑤ ロ → ハ → イ → ホ → ニ

問五　傍線部E「『原作に忠実だ』ということが褒め言葉にもなる」と筆者が考える理由は何か。空欄部を次の形式に従って三十字以内で記しなさい。ただし、「文化」「交換」という言葉を必ず用いること。解答は**国語解答用紙**。

日本のアニメ業界では、**三十字以内**が求められていないため。

問六　傍線部F「毛頭なかった」とあるが、この言葉と同様の意味を持つ内容として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は**17**。

① 色々なかった
② 元々なかった
③ 丸々なかった
④ 偶々なかった
⑤ 更々なかった

問七　傍線部G「説得する」ために筆者が必要だと考えることは何か。不適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 18 。

① 相手を信用しないこと。
② 相手が自分を信用していないと考えること。
③ 言葉を尽くすこと。
④ 相手や状況次第で対応を変えること。
⑤ 論理的であること。

問八　傍線部H「終わらない日常」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 19 。

① 平穏で安定した日常。
② 昨日とは違う日常。
③ 波乱に満ちた日常。
④ サバイバルな日常。
⑤ 毎日が文化祭のような日常。

問九　次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 20 ～ 24 。

1　市民文化に人間中心のシチョウが現れる。 20

①士　②主　③支　④思　⑤志

2　月末の約束をホゴにされた。 21

①反　②補　③版　④歩　⑤浦

3　もてなしの品はジミあふれる逸品であった。 22

①実　②味　③美　④身　⑤見

4　政治家がユウゼイ行脚している。 23

①優　②有　③勇　④友　⑤遊

5　今まで興味がなかった仕事の世界にショクシが動いた。 24

①職　②触　③食　④色　⑤植